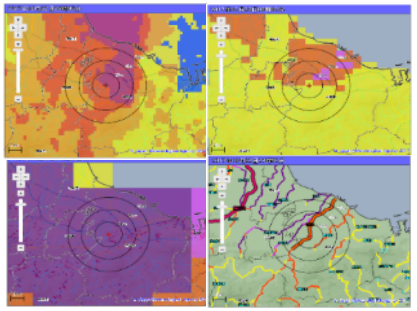
地域社会における防災スイッチを考える

～これからの極端水害に備えて～

京都大学防災研究所　特定准教授　竹之内健介

防災スイッチって何？



地域の災害目印

いろんな災害情報

自分たちの身を自分たちで守るために
地域の災害目印（過去の経験や前兆現象など）や
いろんな災害情報（気象情報や河川情報など）を利用して
災害時の行動タイミングを前もって考えるものです。

H29九州北部豪雨 平榎地区

37世帯92人全員が無事に避難

地区では5年前の豪雨の際に、小さな小川があふれ、傍の家が床上浸水し、みんなで土のうを積んだ経験があった。今回、この家が再び床上浸水し、さらに雨は強まった。それがきっかけとなって、避難しないと危ないと声を掛け合って高い場所にある住宅や公民館に避難を始めた。およそ1時間後、濁流が地区を襲い、数軒の家が流された。しかし、何とか前もって避難でき、死者はゼロだった。

H30年7月豪雨
京丹波町上乙見地区

16世帯32人全員が無事に避難

（写真提供：京丹波町情報センター）

朝6時、突然の大雨だった。消防団は異常な雨の気配を感じ取り、早朝から地区の人々に声を掛け避難を開始した。次第に、濁流が集落を流れ始め、唯一の避難路も土砂崩れで通れなくなった。残った人は消防団の指示で、高台のお堂へ何とか避難した。地区は大きな被害が出たが、全員無事だった。

いろんな防災スイッチ

避難スイッチ

早期帰宅スイッチ

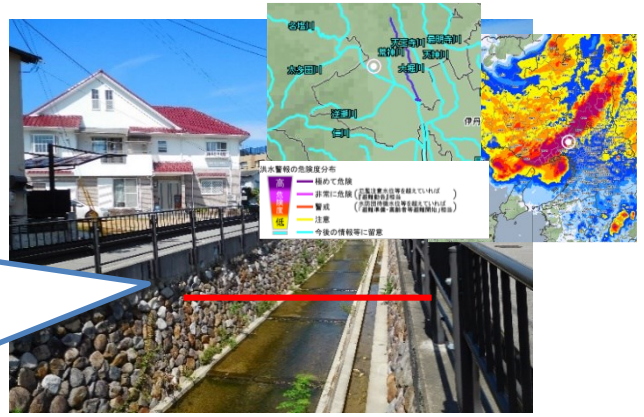
家族連絡スイッチ

水害なんて関係ない、本当に？
いろんな防災スイッチがあります。
自分にあったものを考えてみてください

防災スイッチの例

避難のスイッチ（兵庫県宝塚市川面地区）

地区を小さな川が流れており、あふれたら危険です。そこで、本流から逆流し、水位が2/3を超え、雨が継続する場合に避難を呼びかけます。



（提供元：三重河川国道事務所）

心構えのスイッチ（三重県伊勢市中島学区）

地域の水門が閉まると地域が浸水するおそれが高まります。そこで、河川の水位情報を利用して、水門が閉まる水位を避難に向けた心構えを持つスイッチにしています。

防災スイッチを作るときの5つのポイント

① 地域の専門家であるみんなの経験・知恵を活かす。
（一人の意見でなく、みんなの意見を聞く）

② 避難は避難情報をまずは基本に、避難情報と地域の状況を組み合わせて考える。

③ 必要に応じ、行政や専門家に相談する。

④ 地域の防災スイッチを確認・共有し、それぞれに合った行動をとる。

⑤ 大雨のときは、行動するタイミングがちょうどよいか確認する。

防災スイッチのための5つの活動

① （家やベランダなど、安全な所から）普段のちょっとしたことを記録し、1年に1回雨と周りの関係をふり返る。

② 地域の気象情報を普段から確かめる。

③ 大雨が予想されるときは、水害の素振り（行動練習）とふり返りを行う。

④ 行動するタイミングを考える逃げ始(はじ)訓練をやってみる。

⑤ 実際に大雨となったら、行動する。